

ネギま！　ネギの兄と  
して

紺南

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ネギとその兄が繰り広げる原作とはちよつと違う物語

# 目次

	魔法	一話
	ばれる	—
38	v s エヴァンジェリン(笑)	18 1



## 一話

「うわあ……。人がいっぱい」

「なぜ僕はここにいるのだろう。既に若干後悔してます。はい」

人生で初めてではないかと思われる人一杯。さつきまでの電車で十分わかっていたことだが、やはりこの国には人気と言う名の活気があった。そして人がゴミの様だを如実に表している主要都市は中々新鮮味があった。

もつとも、すぐにその新鮮味は煩わしさに変ってしまったのだが。

「迎えとかはないのか」

「タカミチが駅に来てくれてるはずだったんだけど……」

「いないではないか。来ないではないか」

「うん」

見えず分からず察せず。迎えのはずの若老い、ヘビースモーカ―の称号を持つスモーク野郎タカミチの姿はそこになく、姿形がなさ過ぎて、愛猫のクロが欠伸をしてしまう程に時間が過ぎた。

飽きて空きて飽きた。ネギとも何度か相談して、この飽きに対する結論を出す。悪い

のはどう考えてもタカミチなのだが、飽きにはどう対処するか。

結論、勝手に行くこう。

来ねえならこっちから行ってやると。首洗って待っているよと。そういうことで歩き出す。地図のようなものは渡されていたし、いざとなれば駅員にでも「ま、麻帆良学園つてど、どこすかね、えへへへへ。ぐふ」とでも聞けばいい。

どうやつても辿り着く未来しか見えない。フラグですね、折り返しましょう。フラグをばつきばきに粉砕骨折させたところで重要な事実が気が付く。

「というか遅刻してる?」

「えっと」

ネギは愛用の懐中時計を取り出し時間を確認した。

「8時」

「ほーん。何時までに着けばよかったんだっけ?」

「8時」

「正確に今の時間を」

「8時1分6秒」

「甘い物食つていいこうぜ。バニラアイスでも食べたい気分」

「僕あんこつて言うのが食べてみたい」

和菓子と洋菓子。スイーツ専門店にでも行けばあるのかしら。なければそこらのコンビニで何か適当に買えばいいや。

「抹茶って美味しいのかな?」

「抹茶入りの緑茶飲んだことあるけど苦かったな」

「苦いのかあ……。抹茶味のアイスってあるけどあれはどうなんだろう? 甘いのかな

? 苦いのかな?」

「ビターチョコは甘くて苦いだろ。似たようなもん」

「なるほど」

ぶらりぶらりと街を歩く。どこか良さげな店はないかと探し歩く。

5分も歩いて見つけた店に入り、餡蜜を頼む。あんことか白玉とか、何か色々入っていて、あんこをご所望だったネギは満足したようだった。

「あんこ美味しかったよ。また食べたいなあ」

「機会なんかいくらでもあるさ。何年いるんだ」

二年か三年か。たぶんそれくらい。

さて、8時30分も過ぎて、さっきの店の店員に麻帆良学園の場所を聞いたのでいい加減に行くことにした。

そろそろタカミチも焦っていると思うので、もう少し焦らしてYシャツをびっしやりにしたかったのだが、如何せんネギがうるさい。

責任感ありすぎて生真面目すぎるよー。これはネギ改造計画を推進せざるを得ない。最低でも自分の仕事ほっぽり出した奴にはもつと痛い目見せよう、と思える程度には改造したい。たとえ止むに止まれぬ急用だとしても多少のお茶目ぐらい笑つてこなすぐらいにはしてみせよう。

「退いて退いて!!」

ネギ改造計画書（魔）を広げていると後ろから大声が。朝早くから迷惑だな。選挙カーでも朝はもう少し遠慮してろぞ。

まあ、それはともかく退けて退けてとうるさいから少し右に退けてやった。そしたら今度は後ろのネギの目に計画書が映ったのか、「それ何それ何」とうるさくなったので設計図とだけ言っておく。何の設計図とは敢えて言わない。言ったらこの設計図の命はない。

「明日菜く。もうちよい急がんとあかんでく」

「分かつてるわよー!」

横をぶん、と通りすぎる人影一つ。すいー、と通る人影一つ。計二つ。どっちも女の子だけど前者はどう考えても女じゃありません。ゴリラです。力強さに天と地ほどの



違いがある。立派なゴリラです。

横目でそれを見送って、計画書に目を移す。欠点、改善点を事細かに記してあるそれは、今後のネギの成長に必要な不可欠なアイテムだ。どう成長させるかは個人の勝手ですけどね。

ちなみに欠点の欄には生真面目とか空気が読めないとか常識知らずとか書いてある。いやー、無邪気に無意識に悪意のない善意ほど厄介な物はないね。

「あの、あなた失恋の相が出てますよ」

当の本人に目をやると、そんなことを言っただけの子の足止めしていた。

お前本当、ふざけんなよ。

「は、はあ!？」

態々急いでる所引き留めて何言うかと思っただけならそんなこと。ぼかんとした顔から一転。怒髪天を衝いたまじり顔になる女子学生。あ、本当に失恋の相が出てますね。

「な、何なのよあんだ!？」

「え、いや、あの……。失恋の相が出てますよって……」

「そんなこと聞いてるんじゃないわよ!! なんて見ず知らずのあんだにそんなこと言われなきゃなんないのって言ってるのよ!!!」

マシンガンばりに出るわ出るわの怒りマーク。まあ、急いでる時にこんなこと言われ

たら怒るよね。心に余裕ないもんね。ましてや恋に恋する思春期だもんね。仕方ないね。

「まあまあアスナ」

「止めないで木乃香！ あたしはこのガキに礼儀つてものを教えないといけないのよ！！」

「んー、でもそないなことしとつたら遅刻しはるよ？」

「ぐっ」

「急がんと、な？」

「くっ……。あんた、覚えてなさいよ」

そのまま、ずだだと走り去る女子学生二人。一人はネギを睨み、一人は笑顔で手を振りながら去って行った。

後者はともかく前者はまるで嵐のようだった。その嵐を呼びよせて悪化させたのはネギであるけど、傍から見てた分にはその自業自得がなかなか面白い。

「マジ……」

「呼んだ？」

10mばかり離れた場所から近づく。今の今まで僕関係ないですからの空気を纏つて態度に出していたから、そのことがネギは気に入らないらしい。要はお前も怒られる

と。嫌だよ。

「……………」

「じと目で訴えられてもなあ」

僕困っちゃう。なに大丈夫良い事あるさ。きつとたぶんおそらくね。

「とつとと行こうぜ」

拗ねて返事のないネギを無理矢理押して、先に進む。目の前に見える麻帆良学園へと。

「ほっほっほ。よく来てくれたのお」

なんだこの後頭部。麻帆良学園の学園長室に訪れて最初に思ったのがそれだった。

「迎えのはずのタカミチ君が急用での。すぐに代理の者を寄こしたんじやが、その時は既に君たちは居らんかった。しかし無事に着いたようで何よりじや」

「あ、気にしないでください。僕らも勝手に動いてしまいましたから」

「そう言ってくれるとこちらも助かる」

ははは、ほほほとにこやかに笑い合う学園長とネギ。さつきまで不貞腐れていたとは思えない変わり身だ。

ちらつ、と時計に目をやると既に8時も50分。この学園では朝のSHは何分から始めているのだろうか。

そんなことをネギと学園長の話をBGMに考えていると、ドアがノックされた。

「失礼しまーす」

「失礼します」

「失礼します」

知らない声二つと聞き覚えのある声一つ。

振り返ると、そこには先ほどの嵐のような女子学生と知らない顔が二人。知らない方はどっちも金髪。片方は多分先生かな。見た目的に。小皺的に。雰囲気的に。

「あ、あんた!？」

あちらさんもネギに気が付いたのかずんずんと近づいてくる。まだ怒りは冷めていないようだ。ネギ危うし。

「さつきはよくも——」

「やめなさい」

しかし、ネギに掴みかかりそうになったその嵐を金髪の娘が後ろから羽交い絞めする

ことで止める。ネギセーフ。

「ちよ、離していいんちよ!」

「いきなり子供に掴みかかろうとする人をおいそれと離せると思いました?」

いいぞ。そのまま寝技に持ち込んで四の字固めだ。

余りの白熱振りに、つつい腰を上げて応援してしまいそうになる。元々腰は上げていて、応援なんかとてもじゃないけどできる空気じゃないのでしないけど。

「えっと……」

困惑するネギに先生と思しき人が助け舟を出した。

「紹介しますね。こちら今日からネギ君とマジ君が担当する2—Aの生徒の神楽坂アスナさんと雪広あやかさんです」

先生っぽい人に紹介される。どーもマジです。

「それで神楽坂さん、雪広さん。こちら今日からあなたたちのクラスの担任と副担任になるネギ・スプリングフィールド君とマジ・スプリングフィールド君」

「初めまして、ネギです。あの、さきほどは失礼を……」

「そうよ、あんた! さつきはよくも変なこと言ってくれたわね!」

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

春のネギ謝罪祭り始まるよ。ネギをどれだけ多く謝罪させるかを競うお祭りだよ。

皆もやってみてね。まずは僕が初陣だよ。

ごめんて済めば警察はいらねえんだよ、おお!?

「アスナさん？ 貴方たちの間に何があったのかは存じ上げませんけども」

「何よ?」

「これ以上この子をいじめめるようなら、わたくしがお相手しますわよ」

「は? いいんちよ、私を裏切るって言うの?」

「裏切るも何も、わたくしは最初からネギ先生の味方ですわ」

ほっほっほと笑いながら滑らかな動きでネギに頬ずりする変態。

良い肌してるでしょ? これが子供の肌です。すべすべ具合が全く違いますよ。

これ以上このガキに突つかかるようならいいんちよに投げられそうだと、身の危険を感じ矛先を変える神楽坂さん。変態には極力関わらないことをお勧めします。

「学園長! こんな子供が担任なんていいんですか!」

「いいんじやよ。許可は取ってある」

はて、誰の許可ですかね? 法律に特例設けると後後面倒くさいですよ?

学園長がさらりと矛を受け流したことにより、いよいよ怒りのぶつけ場所を見失った

神楽坂さん。

背後にはいつまでもネギに頬ずりを続ける雪広さんに、口に手を被せて上品に笑う先

生（仮）。

目の前には妖怪然として飄々としている学園長と、三人中二人がアブノーマル。残る一人もノーマルではあるが味方ではないという悲惨な光景。傍から見ても正論ぶつかけて行つた神楽坂さんには同情せざるを得ない。

しかもネギが赴任してしまつた以上平和な学園生活など送れようはずもないから、その同情心はさらに二乗ぐらいにはなつてしまう。

かわいそうだなー。

何とか、何とかできないかと一縷の望みをもつてこちらを睨んできた神楽坂さん。俺はそれに対して、子供らしい純な笑顔で手を振つておいた。

「皆さん！ 朗報ですわよ！」

上から落ちてくる黒板消しに一切の注意を振り払わず、直撃を受けてなおその勢いは

欠片も削がれない。

教室にいたクラスメイト達に物理的にも精神的にも引かれながら、2—Aの委員長、雪広 あやかは新任の先生の存在を熱く語り始めた。

「新しい先生ですわ！ 新しい先生ですわよ！ 予想の斜め上に行く素晴らしいお方でしたわ！ わたくしこれまで生きてきて本当に良かったと——」

「あ、そう……」

雪広さんのネギに対する情熱っぷりたるや何かの病気じゃないのかと疑ってしまう。末期には鼻から情熱が溢れだしそうですね。

「はい！ 雪広さんも他の皆さんも席に着いてくださいねー」

クラスの委員長が暴走を続けてしまっている現状、ついに先生が動きだす。先ほど見た目からして先生だろうかと予想していた人。名前は源 しずか先生。

手をパンパンと叩き、暴走していた雪広さんはおろか不機嫌な神楽坂さん、周りでトンシヨンガタ落ちだった生徒たち全員をわずか数秒で席に着かす。

その見事なお手並みはさすが教師と呼べるもので、これから形だけとは言え教師になる俺たちにとってはとてつもなく眩しい物であった。

これ、実際にやってみると言われたら全力で匙を投げる所存である。だって雪広さんいるし。



「さて、皆さんは既に知っているかもしれませんが、日頃からご多忙であつた高畑先生に代わり、新しい先生が二人いらつしやいました」

「え!？」

どうやら知らなかつた人が一人いたようで、ツインテールに鈴をつけ、40分ぐらい前に嵐とかゴリラとか言われたその人は席から立ち上がりながら、高畑先生の担任クビを今知りましたと全身で表現しつつ、一応やつとくか程度の意味合いで声を大にして不満を叫んだ。

「じゃあ高畑先生はクビつてことですか?」

いや、違う。というかその誤解を生む表現止めろよ。止めて差し上げろよ。

世の中には言つてはいけないこともあるんだよ。例え心の中では分かつていても声には出さないのが優しさつてものだろ。

だから担任クビになつたタカミチのことはしばらく放つておいてやれ。

「そうですね。そういうことになります」

いい加減面倒くさくなつて居るのか、段々受け答えが雑になつてきた源先生。

時間に余裕がないのはさつきから時計をチラチラ見ている所作で十分承知しているので、せめて担任をクビか教師をクビなのか、二階建て一軒家の全長ぐらいの差はあり  
そんな誤解は解いておいてください。

あ、どっちにしても経歴に泥塗ってるだろとかいうツツコミはノーサンキュー。

「では早速ですが紹介します」

源先生が目で合図を送ってくる。白目で呆けている神楽坂さんが気になる所だが、これは今行くしかあるまい。

「失礼します」

「しまーす」

ネギを楯にするように恐る恐る教室に入る。扉の開く音によって一斉に数十の眼が光線のように突き刺さる。

それらはほとんどが前にいるネギへ向いており、ネギはその高い威力にひうつと怯えた。

「向かって左がネギ・スプリングフィールド先生。右ちよつと後ろにいらつしやるのがマジ・スプリングフィールド先生です。年齢は皆さんよりもお若いですが、きちんと英  
国で教職課程を修了していますので安心してください」

それでは、といきなり話を振られる。

こんな皆様ワクワクしていらつしやる中での挨拶とか9歳児にはきついです。うえーん、怖いよお。おねえちゃん、とかの泣き落としは通じないんだらうなあ。

ネギと目と目で語り合うアイコンタクト。

”どっちからやる?”

”最初は遠慮するわ。どうぞ、そちらから始めてください”

”えー?”

「はーい! ちょっと待ったー!!」

お互いに一番の譲り合いという、文字だけで見たら美談なことをしていると一人の女の子が躍り出てきた。

「皆さん色々聞きたいことあつてうずうずしていると思うけど、ここはこの『麻帆良のパラツチ』こと朝倉にお任せあれ!」

びしつと報道部と書かれた腕章を強調しながらポーズを決める朝倉さん。

なんていうか、随分おかしな異名を持っている。それは普通、不本意じゃないのか。

なんかぶーぶー言われながらも皆を宥め、最終的に同意を得られたようで、朝倉さんはメモ帳にペンを持ち、鼻息荒く急接近してきた。

「よし。じゃあ早速色々聞いていこうかねー。あ私、朝倉 和美つて言うんだ。どうぞよろしく、ネギ君にマジ君」

「よろしくお願いします」

「よろ」

「じゃあ早速ですが、お二人は兄弟ですか?」

「はい」

「どちらがお兄さん？」

「一応、俺」

「僕たち双子なんです」

「ほう。……年齢は？」

「9歳です」

「若いねえ。ご出身は？」

「イギリスのウェールズと言うところから来ました」

「どんなところ？」

「寒い」

「自然に囲まれていて空気が澄んでいる、暮らしやすいところです」

「9歳で教師って凄いやね。不安とかない？」

「もちろんありますけど、大人な皆さんの胸を借りるつもりで頑張りたいと思います」

「なるほど。ん、なんですか源先生？ これからもっと踏み込んだことを——。え、

あ、はい。分かりました。……では、時間もありませんし最後に何か一言ずついただこう

かな。まずはネギ君から」

「まだまだ未熟者で皆さんにも何かと迷惑を掛けてしまうかもしれません。ですが精一

杯努力していくつもりです。どうぞよろしくお願いします」

お、さつきまで不貞腐れて且つ怯えていたとは思えない堂々っぷり。

この見せかけの皮の厚さは見習うべきものがあるかもしれない。中身が伴えば一級品だ。

そんな風に他人事のように観察していたら、感心したようにぱちぱちと拍手をしていた朝倉さんから、ずいっとマイク代わりのペンを向けられて何か一言を要求される。

その目にはどこか期待が込められており、『同じ9歳なんだから弟君と同じぐらいの内容のスピーチはいけるよね?』と訴えている。

無理。

「あー……。まあ、何か迷惑を掛けるとしたらネギなんで、ネギのフォローを前面に押し出しつつやっていきます。どうぞ、よろしく」

ネギをdisりつつ無難なスピーチを展開。大したこと言っていない所は、子供だし大目に見てくれるよね?

ぱちぱちと疎らに響く拍手の合間に、授業の終わりを知らせる鐘の音を聞きながら新しい生活の始まりを実感する。

とりあえずは、いきなり問題児扱いされて怒り心頭のネギのご機嫌を伺いながら、職員室に向かうでしょう。

## 魔法 ばれる

麻帆良学園に赴任して三日目。俺とネギ用にと与えられた教職員用の寮に、ネギが神楽坂さんを伴つての第一声。

「魔法、ばれちゃった」

「知らねえよぼけなす」

リアルてへペロ顔を目にして辛辣に突き放す。

というか何故ばれて10分足らずに俺の所まで来るのか。

お前の後ろで待機してる神楽坂さんは何なんだよ。神妙な顔で正座してるんだけど。

せめて一人で来いよ。俺強制的に巻き添え食らってんじゃねえか。どうやって回避

しろって言うんだよ。

「あんたもこいつと同じなのね」

「少しお待ちを」

本性見たりと、神楽坂さんは静かに悪どい笑みを浮かべて正座していた。

この娘怖い。脅す気満々じゃん。もう規約とか無視して忘却呪文使っちゃまおうぜ。

え？ 効かなかった？ なぜか服が脱げた？ ははっ。

「何者ですかね」

「それはこっちのセリフよ」

「もつとも。」

「魔法なんてものが実在してるなんて、にわかには信じがたいけど。でも、納得出来るところもあるのよね。普通に考えて9歳の子供が教師なんてありえないもの」

おい、麻帆良結界。認識阻害結界どうした？ 効いてないぞ。実は魔法なんてないんじゃないの？

結界とか嘘なんだろ。そういうことにしとこうぜ。効いてないし。

「魔法なんてなかった」

「さつき本屋ちゃんが浮いてただけど、それは何の魔法だったのかしら？」

ネギの顔を見る。逸らされた。

え？ なに、お前人浮かしたの？ 本屋ちゃんって関係者じゃないよね？ 浮かした

の？ まじで？

は？ 足踏み外して階段落ちた？ 真つ逆さま？ それは……。まあ、仕方ないの

か。

でももうちよつと何とかなったんじゃないの？ せめて呪文唱えるのも身振り手振

りももうちよつと最小限にできなかつた？

あ、無理？ そっか……。

「少しの勇気が本当の魔法だ」

「何言ってるの」

名言だよ。

「もう正直に言っちゃって、魔法はありませぬ！」

「え、ばらしちゃうの？」

「ばらしたのはためえだろポケナス」

結界効いてない、魔法効かない、魔法見られたの三重苦。これも無理だよ。

本国に助け求めたら強制送還食らうし、そうなると神楽坂さんもただじゃ済まなさそう。なぜ魔法が効かないのか、じっくり調べてから自分たちで対処しよう。

原因分かって効くようになったら忘却すればいいし。今はとりあえず隠し通す。

「……本当にあるの？」

「あるよ」

「本当に？」

「本当」

「本当の本当？」

「本当の本当」



「本当の本当の本当に？」

「しつつけえな。その覚えの悪い脳みそに魔法って刻むぞごらあ」

ネギ、神楽坂さんの双方に若干の距離を取られた後に会話は続く。

「でも、私今まで魔法なんて知らなかったわよ。教科書にも書いてないし、聞いたこともない」

「教科書に載ってるのも、聞こえる言葉も、全部都合の良い物だけだ。普通に生活してたら知らないだろうさ。そもそも極々一部の人間以外は使えないし」

嘘です。めっちゃ使えます。訓練次第で誰にでも使えるのが魔法です。

「明日菜さん。魔法っていうのは使い方次第では人も殺すことが出来る危険な物なんです。ですから通常は秘匿されています。今回は宮崎さんが危なかったため使いましたが、本当なら人前で安易に魔法を使うことは許されてません」

「今回は偶々宮崎さんの命が危険で、ネギが助けるために魔法を使ってしまったところを偶々通りがかった神楽坂さんが見てしまったというわけですね。運が悪い」

ネギにしても、神楽坂さんにしても。両者ともに運が悪い。ここまで偶然が重なってしまうと、誰かが作作的にやったのではないかと勘繰ってしまう。

「ちよつと待って。魔法って秘匿されてるのよね」

「はい」

「それを知っちゃった私って、どうなるの？」

ネギと顔を見合わせる。どうしようか。面倒だからいつそのこと始末してもいいんじゃないかな。

そんな風に物騒な考えが脳内を占める。ネギはどんな考えをしたのか知らないが、嫌に無表情だ。多分相思相愛。

無言の俺たちに微妙な空気を感じ取ったのか、神楽坂さんは慌てはじめた。

「え、ちよつと待って。何で顔見合わせて黙りこくってんの？ まさか殺すとか言うんじゃないでしょね……！」

「……いえ、大丈夫です！ 殺しはしません!! 魔法には忘却呪文と言う種類の魔法があつてですね……!!」

身の危険を感じた神楽坂さんは両腕で体を庇いながらじりじりと後ずさる。すぐ後ろにはドアあり、いつでも逃げられる体勢。

ネギも我に返って否定した。否定してるけど別に考えなかったわけじゃないでしょ？

「でも、忘却呪文効かなかったんだろ？」

「それは……。その……なぜか記憶の忘却じゃなく、衣服の消失っていう結果になっちゃって……」

「間違つて武装解除術したんじゃないやねえの？ —— どれ」

効かないかどうかは実際にやってみるしかないってことで、神楽坂さんの頭に手を当ててみる。

何かされそうになり、慌てて逃げ出そうとするが手を当てた時点で既に準備は整っていた。

メモリア・リツラ

簡単なキーワードでそこそこ難しい魔法が飛ぶ。

その魔法は何故か、本来の目的である記憶の消去ではなく、着ていた服の消失と言う形で効力を発揮してくれた。

「……………」

「……………」

「……………」

まあ、これは叫ばれても仕方がないかな。

顔を赤くした絶叫5秒前の神楽坂さんを止めることはせず、耳を塞いで深く観念した。

職員寮に人がいないことを切に願う。

「で、だ。俺たち兄弟から神楽坂さんをお願いがある」

「なによ」

「あ、明日菜さん。とりあえずこれを着てください」

幸いにも、この時間帯にはまだ帰ってきている人はいなかったのか、他教職員の来襲イベントは発生せず、布団が一枚強奪された被害だけで済んだ。

気を取り直し、布団に包まっている神楽坂さんにネギが大人物のジャージを渡しながら、今後のことについて話し合う。

「魔法の事は口外しないでほしい」

「嫌だって言ったら？」

「その場合は残念ながら、まず神楽坂さんは精神的におかしくなってしまったと言う噂が流布される」

「それで？」

「その噂がある程度広がった状態で神楽坂さん本人の口から魔法について語られた時が、神楽坂さんの学園生活の最期となる。あとは黄色い救急車が手ぐすねを引いて待っているから、格子付きの部屋の中で第二の人生が始まってしまふ算段だ」

「口外しないわ」

「ありがとう」

身の安全が確保された。

「じゃあ解決だな」

「え」

「神楽坂さんの今後については当事者であるネギに任せた。まだ何か聞きたいことがあるのならネギに聞き給え」

「ちよつと」

「それでは各自解散。俺は買い物に行くから」

「マジ!?!」

エコバック片手に部屋を出ようとしたところで、加害者ネギが肩を掴んできた。  
「いいいいいいい。」

「何だよ」

「僕一人に全部押し付けないでよ!?!」

「責任の所在は全てネギにあると思うから」

「そうだけどきー！」

どうやらネギ一人には荷が重いようである。

そこに俺一人が入ったところで物理的な負担に大した違いはないけど、ネギの精神的負担は大幅に軽減される。ネギの狙いはそれだ。代わりに俺の負担が5割増しぐらいになってしまふのだが。

これはやはりネギ一人に何とかしてもらうしかあるまい。まだ教師生活にも慣れていないのに一歩間違えたら強制收容所行の案件まで背負えるか。

そんなの背負うのはネギ一人だけでいい。

「ねえ、ちよつと」

「何だい神楽坂さん。魔法についての用件ならネギが担当だからそつちに言つてね」

「いや、そのことなんだけど」

神楽坂さんは俺とネギの顔を見比べる。

ネギは泣き顔で、俺は面倒くせえと眉間に皺を寄せた顔だ。どちらも酷い顔してる。少しの間俺たちの顔を見比べていた神楽坂さんは、やがて苦渋の決断をしたように、顔に陰を落としてぼつりと呟く。

「……どうせなら頼りにならなさそうなネギよりあんなの方が良いんだけど」

「明日菜さん!」

「ご指名いただきました。ありがとうございます!」

「いや……。だって……」

「僕そんなに頼りなさそうですか!? こう見えても僕マジよりも成績良かったんですよ!」

「お、自慢か?」

成績云々は今関係ないだろ。俺の成績を一々引き合いに出すのやめろ。はっ倒すぞ。

「あの、色々聞きたいことがあるのよ。それで……。どうせならネギだけじゃなくあなたにも色々聞きたいの」

「タカミチのことなら本人に聞け」

「な、ちよつ、なんで高畑先生が出てくるのよ!」

露骨に話題を逸らしつつ、顔を赤く染めて髪をいじりながら喋ってるからですよ、お嬢さん。

いやー、この年代の子の恋愛事情は分かりやすすぎていかんね。もう少し年食ったら、総じて真黒のドロドロになっちゃうから、清涼感があって好きなんだけども。

「私が聞きたいのは高畑先生の事だけじゃなくて! 他にもあんた達みたいなのはいるのかとか! 魔法って具体的にはどんなのとか! とにかく一杯あるのよ!」

顔真っ赤に叫ぶ神楽坂さんの言によれば、俺たちに聞きたいことは一杯あるらしい。それは全部が全部照れ隠しというわけでもなく、半ばぐらいは本心からの言葉だと思う。

さて、適当に誤魔化すのも嘘を教えるのも、むしろ何も教えないのも、選択肢は色々あるのだが。

今までの短い人生の中でフィクションだと教えられ、そう思い続けてきた、胸躍るようなファンタジー。

14歳の女の子が、実際にその目で実在を確信したファンタジーについて「何も見なかったことにして忘れてください」と言われて素直に納得できようはずもない。

落ち度はほとんどこちら側にあり、神楽坂明日菜には何故か忘却呪文が通じない。

神楽坂明日菜と言う不確定事項。放っておいて余計な行動を取られるよりは、ある程度情報を与えて掌の上に居てもらった方が良い。

ネギ一人操れないのに神楽坂さんも操れるわけもないが、ある程度は目の届く範囲に居てもらいたい。

ならば、先生と生徒の垣根を越えてほんの少し仲良くしようじゃないか。それが一番都合がいい。

だが、仲良くするにも何をすることも準備は必要だ。今日の所はお引き取り願いたい。



「5時だな」

時計を見ながら言った言葉に、ネギも神楽坂さんもほとんど同時に時計を見る。

窓から届く夕陽も、俺の言葉を裏付けてくれている。

いい子はいいい加減に帰る時間。

「今日の所は大人しく帰りなさい。続きは明日話そう」

「いやよ」

教師面しての命令への返答はほぼノータイム。そう言われることを予測していたのか即答だった。

「いや、帰れよ」

「帰らないわ」

「……………」

「……………」

無言で見つめあつた後、ぶつかる。

「かーえーれー」

「いーやー」

顔を突き合わせて互いの主張を押し付け合う。

思い通りに動かない神楽坂さんに、菩薩の異名を持つ堪忍袋もはち切れんばかりに膨

れ上がる。

緒なんかとつくに吹っ飛んだ。

「まあまあ。落ち着いてマギ。明日菜さんも」

「誰のおかげだと？」

「あんたは黙ってなさい」

「はい」

涙目で正座するネギを尻目に素全開で話し合う。

「いいから今日の所は黙って退散しろよ。明日までに言っただけの悪い事と悪いこと書いた紙をネギに暗記させるんだから」

「あらそう。でもそんな無駄な努力は必要ないわ。悪いことも良い事も今この場で聞くから」

「言えるわけないだろ。一般人に何でもかんでも言えるかよ。分かっただけ早く自分のお家に帰れ」

「なら私ももう立派な関係者でしょ？ 聞く権利はあるわ」

「ねえよ」

「ある」

「なーいー！」

「あーるー！」

一般人に一本だけ産毛が生えた程度で関係者とか片腹痛いわ。

関係者名乗るのなら誰かと仮契約の一つでもしてこい。

「ちつ。言う事聞かない木偶だな」

「あんたよく教師出来てるわね」

俺も何で教師なんてやってんのか常々疑問だ。9歳の子供って時点で普通は弾かれるはずなのに。

魔法って素敵だね。

「帰らないのなら力づくで帰してやる。魔法使い舐めんなよ」

「は？　また服でも脱がせようって言うんじゃないでしょうね。言っとくけど、今度脱がされたら容赦しないわよ。ぼっこぼこよ？」

「たかだか9歳の子供に裸見られたからってそんなに怒るなよ。生徒の裸見て興奮とかないから」

「あんたの気持ちの問題じゃなくて私の気持ちの問題なの」

そうか。女心って複雑なんだな。

まあ、魔法の効力を変えているのか無効化しているのかもわからない相手にそう易々とぶつ放せるわけもなく、脅す様に構えていた手は降ろし、髪を搔く。さて、どうしよ

うかな。

「……何よ。来ないの?」

「そんなに脱がされたいのか。この痴女め」

「殺す」

「来んな。布団剥ぐぞ痴女」

ファイティングポーズを決めていた神楽坂さんは、腕を降ろした俺に怪訝そうにそう言ったが、続いた煽りに冷静ではいられずに殺しに来た。

来るな来るな。こつち来たらむしろ殺す。

「お前隙間からちろちろ胸見えてんぞ! ジャージどうした!」

「まだ下しか穿いてないのよ」

「首絞める余裕あるのならとつと穿け!」

やけに俊敏な動きに易々と背後に回り込まれ、チョークスリーパーのような形で技を決められる。

結果、後頭部に胸が当たる。なにこれ不快。邪魔。

「ネギ! ネギ!!」

「どうせ僕なんて……」

「一々ネガティブな野郎だな!」

助けを求めたネギはどん底に沈んでおり、今更ながらに自分の不始末を後悔していた。

その間にも、本気で殺しに掛かってきている神楽坂さんは俺が絶対に逃れられないように床に押し込み、上から全体重を掛けながら首を絞める。

じたばたと暴れるも9歳の子供が14歳の女に敵うはずもない。これは殺される。

奴の殺意を背中に感じながら死を覚悟したその時、

「あすな〜?」

女神が来た。というか近衛木乃香が来た。

「……………え。……………あすな? なにしてるん?」

「……………教育よ」

「えつと……………」

目だけ動かして近衛を視認した神楽坂。問われた言葉には短く返す。

対する近衛もこの状況に理解が追いついていないようで、狼狽えている。

無理もない。まさかドアの向こう側でルームメイトが半裸で子供を絞殺そうとしていたとか思わないだろう。

近衛の出現に、若干力が弱まった隙を突き再度ネギに助けを求める。

「ネギ!!」

「あ、え……？ あ！ 明日菜さん！ 何やってるんですか!？」

届いた言葉にようやく正気に戻ったネギ。俺たちの現状に気づいて、慌てて救出に来る。

そしてネギが中々離そうとしない神楽坂さんに苦心し、ぼうつと突っ立てただけだった近衛さんにも助けを求めたことでようやく解放された。

助かった。

「明日菜。何でこないなことしとったん？ とりあえずこれ着て」

「マギ、大丈夫？」

「全然」

平気です。空元気とかじゃなくて、まじで。

「木乃香もネギも大げさよ。本気で殺すわけじゃないじゃない」

ジャージのチャックを閉めながら神楽坂さんは弁明する。

まあ、さすがに死ぬほど力がかかっていなかったけど、それでも少しずつ加えられる力増してたし。

それに傍から見たら子供を襲っている女子中学生にしか見えなかっただろう。

「あいつが生意気だったから軽く脅しただけよ」

「脅しつて……。そないな空気やあらへんかったよ。割と本気やったやん」

「そう？　ま、私子供って苦手だし」

そこで視線を下に、俯きながら小声で紡がれる続きの言葉。

「きいきい喚いてばっかであうさしい。話そうにも人の話聞かないし。もう、肉体言語に頼つていいじゃない。どうせ怖がらせれば言う事聞くし」

あいつ絶対に母親になつちやいけない人間だ。子供にも同じことしそう。

もしあいつが結婚式挙げようとしたら未来の子供のために全部ぶつ壊しに行つてやる。

内心でそう誓った。

「で、どうなのよ。話してくれるの？　くれないの？」

「……ああ。お前の凶太さは尊敬に値するよ」

何も知らない近衛さんが来たというのに、その話題を続ける辺り特にね。

「ま、夜にな」

「そう。……ま、それならいいわ。じゃあね」

言うだけ言って、ジャージ姿のまま部屋から出て行く神楽坂さん。

そう言えば、今日だけで制服が二着粉々になつてしまつていくけど、明日以降の授業はどうするつもりだろうか。

まだ予備の制服あるのかな。

「ネギ君、いったい何があつたん？」

「僕もよく分からないです」

分かつてなくてはいけない人間が分かつていないこの現状。

恍けているかしらばつくれているのか。どっちかだったらお兄さん凄く嬉しい。

「マジ君？」

「ちよつとした喧嘩。タカミチ関係で」

近衛さんにはそれっぽいこと言っておいて煙に巻いておく。

まさか魔法の事を詳細に話すか話さないかで取っ組み合いになつたとか言えるわけ  
ない。

言つたら病院をお勧めされるんじゃないのかな。それとも子供の戯言だと流される  
か。

「ネギ」

「なに？」

「学園に用事思い出したからちよつと行ってくる。夕飯は適当に済ませておいて」

「分かつた」

「え。ちよつ、マジ君!？」

近衛さんとの会話もそこそこに、俺も靴を履いて外に出る。



神楽坂さんはおそらく自分の部屋に戻ったのだろうが、それを追いかけることはせず  
に麻帆良学園の方へ向かう。

今日中に何とか出来ると良いなど、出来ようはずもない事を望みながら、歩いた。

## V S エヴァンジェリン (笑)

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

3—A所属。出席番号は26。見目麗しい金髪の幼女であるがゆえ、如何せん發育不足感が否めない。

そんな少女だが、自分の担当する保健体育の授業でその姿を見た覚えがない。ネギが言うには英語の授業にも出席していないらしい。早い話が問題児である。

これは早急に何とかせんといかんなど思っていたところから、物語は始まる。

さて、物語の冒頭。4月8日の夜、夕食の席でのこと。

いつもよりも早く夕飯を食べ終わったネギは、味噌汁を啜っているマギへ神妙な顔を見せた。

「捜査しよう」

ネギが何を言ったのか、言葉足らずで要領を得ず、マギは聞き返す。

「え、なんだって?」

「桜並木の吸血事件の捜査しようよ」

「な、なんだって—!?!」

今日、佐々木まき絵が桜通りで居眠りをこき、身体検査に遅れるという事件があった。マジはその時、メジャー片手に生徒たちのスリーサイズを測っていたので詳しくは知らないが、何やら当人には吸血痕らしきものがあつたそうだ。

教え子が被害者になってしまった以上、教師である自分たちが動かずして誰が動くのかと、ネギは瞳に燃える炎を宿して熱く語つた。

紙メンタルの癖して格好いいこと言うじゃないかとマジも何となく頷き、早速今晚から桜通りをパトロールすることとなる。

完全な奉仕活動。マジが報酬も何もないそんな活動をするとは通常では考えられなかったのだが、その時だけは頷いてしまった。

「春と言えどもまだ外は寒いぞ。着込めよ」

「でもそれじゃあ、もしもの時動けないけど」

「もしもなんてない」

「そうだね」

大した思いも、大それた覚悟もなく、何となくで始めたこの捜査に、後々後悔することになるのは必然だった。

「あ、カモ君も連れて行って良い?」

「鎖の鍵失くした」

「え」

「嘘だろ旦那ああああああああああああああああああああ  
檻の中の小動物が絶叫した。」

!!!!!!!!????????????

桜通り。文字通り桜の木が何本も植えられ、春になると桜の花が舞い、綺麗な景色が見られる。

今日みたな良い月が出ている晩は、夜桜に月の光が反射して格別綺麗である。

「夜散歩しても見るのは変質者か吸血鬼ぐらいだ。平和な土地だな」

「そうだねえ」

「残念だが、吸血鬼が出る時点で安全ではないぞ」

聞こえた声。目の前で倒れている綾瀬のどか。

それに覆いかぶさるような体勢で口の端から血を溢す金髪幼女。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

ゆつくりと立ち上がった彼女はネギたちに悪どい笑みを見せた後、偉そうな口調で問うた。

「こんな夜更けに一体どうした？ 善い子供は寝ないと駄目じゃないか」

くつくつく。風の吹く音以外にはその笑い声だけが響く。どの口が言っているのか。

「ふつ。本当はもう少し魔力が溜まってからのつもりだったのだから。ここで会ったのも何かの縁だ。少し遊んでやろう」

フラスコに入った液体がばらまかれ、空気に魔力が充満するのを二人は感じた。明らかな戦闘態勢。

——いきなりなんだこいつ。

マジとネギの思いは重なり、お互いに顔を見合わせる。そして、

「魔法の射手炎の5矢」

マジが不意に攻撃した。

ほとんど奇襲に近い無詠唱魔法だったが、エヴァンジェリンはその魔法を跳ぶことで軽々躲す。

「はっ、いきなり攻撃とは正義の魔法使いらしくないな」

「そうかね？」

何だか厨二臭い言葉に辟易しながら、マグも跳んで、エヴァンジェリンに急接近。「悪を倒すためには一々慎んでられないのだ」

再び炎の射手。ただし今度は連弾。

エヴァンジェリンはそれを魔法障壁で防御し、高笑い。

「はっはっ!! 悪を殺すために手段を選ばないその矛盾! いいぞ、わたし好みだ!」  
エヴァンジェリンの右手に魔力が集束する。魔法攻撃がくる。

「集え氷精! 弾けて凍れ!」

「炎楯」

発生した凍気。それは炎の楯で防がれ、爆風を生む。魔法同士がぶつかった衝撃波に乗り距離を取った。

先ほどから響く爆音爆音&爆音。結界も張っていないこんな場所ですらいつまでも戦ってられない。

そう判断したマグはネギに大声で確認する。

「ネギー!」

「のどかささん確保!」

「よっし逃げるぞ!!」

「……なに？」

マジは詠唱を始めた。

”ものみな 焼き尽くす浄化の炎 破壊の王にして再生の徴よ 我が手に宿りて敵を食らえ”

「赤き焰！」

エヴァンジェリンの視界に広がる炎。障壁で防いだので、ダメージはないまでも目くらましには十分だ。

その隙に瞬動瞬動瞬動。急げや急げ。鬼の来ぬ間に。

「くっ、逃がすと……。っておい！ 本当に逃げるのか!? おい!!」

後ろ、はるか遠くから聞こえる声。

そのどこか寂しさが籠る声を見視するのは、さすがのマジも気が咎めた。

仕方がない。本当なら吃驚驚きサプライズのつもりだったが、今ここで伝えておく。

「明日家庭訪問行くからア!! おいしい茶菓子用意しておけよお!!」

聞こえたかどうか。返事はない。でも行く。

明日行くからな。ネギも一緒だぞ。本当に行くぞ。なんなら今からでも行くぞ。

夜道を疾走する影二つ。生徒寮に綾瀬のどかを届けるため、スプリンフィールド宅配

は今日から行く。

翌日、早朝からネギと作戦会議。

昨晩は途中で起床して顔真つ赤つかの綾瀬を寮に届けた後、マクダウエル家に深夜の家庭訪問に行こうかと思っただが、カモの並々ならぬ静止により結局は取りやめになった。

曰く、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは本当にやばいらしい。

600万ドルの賞金首。数百年を生きる真祖の吸血鬼。殺した人間数知れず。なまはげ同様の扱いを受け、見たら死ぬと言われる最恐最悪の魔法使い。

そんな話を聞かされれば紙メンタルのネギは恐怖に慄き、「今日は止めよう」と言うのも当然だ。カモもその言葉を聞いて安堵に胸をなでおろした。

そして、一連のお話の後、歯を磨いている最中に付け足された「でも明日は行くぞ」の声にカモは絶句した。

「本気かよ旦那?!」



「本気も何も前から決めてたし」

「相手は真祖の吸血鬼だぜ!? 家に入った瞬間殺されちまうよ!」

「大丈夫だろ。多分」

確証のない自信がカモを貫く。

にべもなく、カモが何か言う前にネギもマジも寝る準備を始めた。

檻の中から訴えかける言葉は被せられた布に遮られ、檻の中で虚しく木霊する。

それが昨夜までの出来事。

早朝、朝ごはんの支度を始めるネギ。

それに続いて起きるマジ。カモはこれ幸いと昨晩の主張を改めて訴える。

「旦那、兄貴! 聞いてくれ! 真祖の吸血鬼は本当にやばい! 一度戦って逃げ切れ  
てる時点で奇跡に近いんだ! のこのこと出向くなんて自殺行為だ! 旦那、考え直し  
てくれ!」

「醤油がないな」

「買ってこないとないね」

「家庭訪問の帰りに買ってくるか」

「チラシ見ておくれ」

「良い特売やってないかな」

「旦那ああああ!!」

家庭訪問実施決定。

「せめて……、せめて俺っちを檻から出してくれ! 解放してから行ってくれ!」

女子生徒寮に侵入し、神楽坂明日菜に殺されかけたカモ。

檻に閉じ込めておくのが、カモ救出作戦の結果、最大に譲歩された妥協案なので、ここで開放するとカモの命はおろかネギの命も危うい。マギに関しては真っ先に殺される。

女の恨みは執念深いとネギたちに悟らせた出来事である。

「お前は暫くそこだ」

「そんな……。そんなあ……!!」

地面に拳を打ち付けるカモ。望みは叶わず、言葉は届かない。

何と己の腕の無力なことか。彼は餓死する覚悟をして、この日一日を過ごした。

そして授業を無事に終え、待ちに待った放課後。エヴァンジェリンは午前の授業で延々睨みを利かせ、午後には行方をくらませた。

多分家で今か今かと布団に頭を突っ込んで待っているに違いない。

萌え。

「さあ行くぞネギ。にんにくの準備は出来たか？」

「十字架なら作っておいたよ」

「十分だ。さあ、行こう」

真祖の吸血鬼対策は万端に、二人で個人情報の記事された紙片手に学園の敷地内にぽつんと建っているコテージへと向かう。

コテージに着き早々、扉の前には出席番号10の絡繰茶々丸の姿が。

頭ついた変な機械がびこんびこんと上下している。

二人、紙を見ると確かに絡繰茶々丸の住所はこのコテージになっていた。

「やあ」

「こんにちは。茶々丸さん」

「お待ちしていました。マギ先生、ネギ先生」

ぺこりとお辞儀をした絡繰に気やら魔力やは感じられない。

元々機械なのだから感じられないのは当たり前だ。

言いたいことは戦意が感じられないと言うこと。戦おうというつもりはないようだ。

「マスターがお待ちです。どうぞこちらへ」

促されたのはコテージの中。二人は特に警戒することもなく普通にコテージへと入った。

「待っていただけ、坊やたち」

中には椅子に存大な態度で腰かけ、トマトジュースを啣る真祖の吸血鬼。

悲しいかな。彼女の容貌と背後の微笑ましいぬいぐるみとが相まって、吸血鬼らしい威厳は欠片も見えない。

「宣言通り家庭訪問に来たぞ。もてなせよ」

「お邪魔します。エヴァンジェリンさん」

「ふん」

茶々丸に勧められ、エヴァンジェリンの対面の席に着席した二人は持ってきたバックから数枚のプリントを取り出す。

そしてマギが深刻そうに話し始めた。

「さて、絡繰さん。エヴァンジェリンさんのことなんですが」

「はい」

「あまりにも授業態度が悪い。また、英語や保険体育にはほとんど出席していないというところで、今日こうしてお家を訪ねさせてもらいました」

「……はい」

「成績自体はそれほど悪くはありません。中の下と言ったところですが。ほぼ全ての授業をボーコット且つ居眠りかましているにしては奇跡的な数値です」

ネギ引き継いで喋る。

「これは僕個人の考えですが、エヴァンジェリンさんはやればできる子です。まだ遅くありません。僕たちが全面的に協力していきます。これからゆつくり、矯正していきますよ」

「はい……。ネギ先生、マジ先生……。よろしくお願いします」

「任せてください。これから俺たち二人でこの吸血鬼を更生させて見せます」

茶々丸が涙を拭く演技をし、マジがそれを見て拳を握り意気込む。ネギも横で深く頷く。

ただ一人、この場の空気に感銘を受けなかった成績中の下、素行不良のエヴァンジェリンは苛立ちながら呟いた。

「……………茶番は終わりか？」

「待つて。まだ。これから三人で泣くから」

「茶々丸、茶を持ってこい。ついでに菓子もだ。こいつらには一番安いのでいい」  
「かしこまりました」

茶々丸が主人命令で席を立ち、茶番は強制的に終わった。

それを見て、ネギは一枚のプリントを残し他のプリントはバックに戻す。

その残ったプリントを突きつけ、マジは言った。

「おい、出席日数足りてないからこのままじゃ卒業できないぞ」

「はっ。貴様私に喧嘩売っているのか？ 卒業などはなっから出来んわ!!」

テーブルに拳を叩きつけながらの怒声にネギが怯む。逆にマジが氣勢を上げた。

「ああん？ そうやって最初から諦めてるから卒業できねえんだよ！ 諦めんな！ お

前なら出来る！ 登校地獄なんか屈するな！ それでも真祖の吸血鬼かよ！」

「真祖だろうと出来ん物は出来ん！ 大体私がこうなっているのもお前らの父親が滅茶

苦茶な呪文をかけたせいなんだぞ?! 責任を取れ！」

「知らねえよそんなもん。顔を見たこともない親父の代わりに責任なんか取れるか！

本人に取らせろ、生きてるから！」

「なんだと!？」

だんつとエヴァンジェリンが立ち上がった。

その眼はまっすぐマジを見ており、いまの言葉の真偽を探っている。

数瞬して、マジからネギへと視線は移った。

「おい、今の話は本当か？」

「え、ぼく？」

「貴様以外に誰がいる？ さっさと答えろ！」

「は、はい！」

説明。

村が悪魔に襲われたこと。

それで絶体絶命の危機に陥ったこと。

その時助けてくれた人がいること。

その人が杖をくれ、祖父に確認したところ、それはナギが持っていた杖と一緒に物だと言う事。

その辺りの事をざっくりらばんに説明した。

「……………」

話が終わった後、エヴァンジェリンは無言で瞑目していた。

マジとネギは茶々丸が淹れてくれたお茶を飲みつつ、エヴァンジェリンが何か言うのを静かに待っている。

数分たつて、いい加減焦れたマジが、エヴァンジェリンに向けて十字架とにんにくを投げつけようとした時だった。

「そうか……。奴は生きているか」

何だか言い知れない感情の籠った呟き。

それを聞いて、さすがのマジも投げつけるのを躊躇した。躊躇しただけで投げつけはした。

悠々と躲したエヴァンジェリンは、茶々丸に命じる。

「茶々丸。計画は中止だ。奴が生きているのなら奴自身に呪いを解かす」

「はい。マスター」

何を言っているのかちんぷんかんぷんなネギ。

何のことだろう、とマギに尋ねた。マギは首を横に振って言う。

「ババアの考えることはわからん」

「聞こえているぞ」

ぎろりと威圧感が二人を襲う。ネギが怯え、マギは視線を逸らした。

そんな二人を見て、エヴァンジェリンは鼻を鳴らす。

「ふん。何かと癪に障る奴らだが、ナギが生きていることを教えてくれたことには礼を

言おう」

偉そうにふんぞり返りながら上から目線での感謝。

さすが真祖の吸血鬼は傲慢だ。

「礼なら行動で示してもらおうか。明日から授業に出るな?」

「それはそれ。これはこれだ。授業に出るか出ないかはその日の気分次第だ」

マギの額に青筋ぴきり。

「まあ、しかし感謝はしているからな。前向きに善処するさ。前向きにな」



政治家のようなのらりくらりとした答弁もどきに、ついにマギの堪忍袋の緒が切れる。

『よろしい、ならば戦争だ』そんな幻聴がネギには聞こえた。

「いよおし。先生怒っちゃったぞお」

いそいそと帰り支度を始めたマギがそうのたまった。

「あ、やるんだ」とネギの顔色が真っ青になり、エヴァンジェリンが怪訝げに二人を見る。その表情は、マギがカバンの奥の奥から取り出して突きつけたそれを見て、驚きへと変わる。

「吸血鬼退治だ。生徒と先生の上下関係を体に教え込んでやる」

『決闘状』と書かれたそれは、稚拙な字で宿題プリントの裏に書かれていた。

宿題ついでに決闘を申し込まれた事実には、エヴァンジェリンは複雑な表情をして、マギの正気を問う。

「貴様馬鹿か？」

「馬鹿はお前だ。中の下」

馬鹿レンジャーが新しい席を用意して手ぐすねを引いて待ってたぞと、ぞつとする事実を聞かされ、「しかしどうせならもつとちゃんとした紙に書いて来いなんだこれは宿題か」という思いも抱く。

もしこれがきちんとした様式で書かれていた決闘状だったのなら喜んで受けていただろう。どこかぱつとしないのはやっぱりこの紙のせいなのだ。

たった一枚の紙でここまで士気を削ぐとは……。

戦いは今から始まっている。

「日時はお前の好きな時で良いぞ」

「……いや、本当にやるのか？」

「やるに決まっているだろ。何だ逃げるのか？ はつ、さすが真祖の吸血鬼(笑)は格が違えますねえ」

「一か月後の満月の日だ。殺してやる」

「OK」

決闘の日付があっさりと決まる。

次いで、エヴァンジェリンと茶々丸 v s マギとネギで行い、一般人を巻き込まないように配慮して行うことが取り決められた。

マギ達が負けた場合は命の危険と、ネギがエヴァンジェリンの下僕に。

勝った場合はエヴァンジェリンが向こう二年間優等生を演じることで話は決まる。

「よおし、覚悟しとけよ吸血鬼。お前の苦手なニンニク十字架流水日光炎杭銀、全部もれなくお見舞いしてやるからな」

「別にかまわんが、私は真祖だからほとんど効かんぞ」

「最悪落とし穴に引っかけた全部投げ込むから大丈夫」

「……ああ、やはり親子か」

エヴァの目は昔を思い出して虚ろになる。

マジは「こいつ何か変なこと思い出してるな」と胡乱気に、ネギは今更ながら事の重大さに気づき声もなく「あわわわ」と震えていた。

茶々丸のくすくす笑いが触りの良い空間だった。